

# 京鹿子

平成二十六年十一月二十日発行  
定価一〇八〇円（税別）



11月号

豊 田 都 峰

心響集 その十一

麦茶飲むのどより雲のわく湖国  
もろともに峠の風と麦茶飲む  
いちにちの風得る朝のダリヤかな  
得しつばさひろげ春野のひと日なる  
夕かげのかやつり草の橋がかり  
糸のころ草触れつつひぐれならしゆく



草ひばり石仏の朱のことに濡れ  
陶の椅子ふたつ置かれて草ひばり  
木もれ日は遠かなかなのさそひ徑  
唐辛子干して野の日の手の内に  
燕去ぬよびもどせなき日を置きて  
海へ出てほぐれくれゆくいわし雲  
誰もかげばかりに夜のいわし雲  
野にだれもゐないひぐれの吾亦紅



— 近 詠 —

## みのこづち

鈴鹿 仁

みのこづちでかい夕陽の山隠れ  
牛車きてそれらしくなる時代祭  
十三夜かつらをとも水となり

— 追懷 — (その三)

名も知らぬ里鳥翔てま涼残す

(昭和五十四年作)  
(嵯峨吟行)

話題なき葉桜の道素通す

(昭和五十五年作)  
(吉田山吟行)



— 近 詠 —

## 夜光虫

和田 照海

水 の 番 入 道 雲 と 交 替 す

灘 し ほ の ふ く ら む き ざ し 夜 光 虫

島 の 盆 甘 へ 泊 り の 二 夜 かな

島 の 母 校 へ 返 す 磯 笛 鮑 海 女

父 の 忌 や 壇 の ま む し の 赤 き 舌

## 秀華採集

風の絵の画廊の窓や秋近し

鈴 鹿 けい子

古来秋の訪れと風のかかわりは目に余るが、「風の絵」と把握したところは感  
覚的で斬新。それにふさわしい空間を設定する。多方面な題材に挑戦、好調を維  
持している。

滝落ちて竜の骨格造りたる

中 島 悠美子

桐一葉拾ふ我が掌の小さくて

中 尾 朱 帆

竜門を登った鯉は竜になるという故事をうまく引用しつつりっぱに落ちる滝の  
姿を詠う。後句は、具体的に己を認識している。とくに「桐一葉」とのひびき合  
いがよい。



# 神麓集

星月夜

藤岡紫水

笹舟に童心を乗せ澄める水  
句を詠むは祈りにも似て星月夜  
戸隠や舌ざはりよきとろろそば  
閉ざすには惜しき夜毎の窓の月  
秋のいろ持ちて満ちゆく波頭

神の留守

故松本鷹根

運動会老人席の静かに混む  
野仏に縫る露草泪溜め  
稔り田を見廻る夫に蹤く歩調  
色の田の風に褪せゆく赤とんぼ  
延命の水滾々と神の留守

松田都青

飛ぶの字の何処が飛ぶのか炎天下  
何を書き何を語らん熱帯夜  
老兵の歩幅で歩く羽拔鶏  
善人が汗かいてゐる歎異抄  
峠茶屋ポンとラムネの音がする

我流体操

北川孝子

草も木もそよぎ忘れし雲の峰  
朝ごとの我流体操涼しかり  
夏座敷今生いきいき語り次ぐ  
紙魚の書を積み今日も生きて居り  
消息の深くは追はず秋隣

花石榴

丸井巴水

抜け殻となる釣り人の夏日陰  
ほのぼのと残りし戀や花石榴  
夏鳴や嶺の高さを意識せず  
初蟬やすて置く穴の青き闇  
串鮎の尾は跳ね沖の島かすむ

白蓮

塩貝朱千

師よ母よ咲きまどはせる白蓮  
青女てふ寢息のやうな細き滝  
瑠璃柳ひよろり虚無僧待つ夕べ  
桔梗や青き血渴く午後三時  
蓮池のまん中にゐて悪女かも

## 私の好きな

### 格調高き大正俳句

鈴鹿 呂仁

短夜や乳ぜり泣く児を須可捨焉乎すてつちまをか（大正9）

竹下しづの女

歳時記の「短夜」を引くと、代表句として必ずこの句が、掲載されている。そして「須可捨焉乎すてつちまをか」にはルビがふつてある。初学の頃には、何も知識を持たないので、子育てに追われている若い母親

による、異常なストレスの発散の為せるわざとの認識しか持ち合わせていないのである。しかし、この「須可捨焉乎」には、反語の意が含まれていることを知ると、俳句でよく言われるところの省略を効かせる重要性を、俳句を始めて日の浅いしづの女が理解していたことに驚くばかりだ。そして、この大正の時代に俳壇復帰した虚子が、「ホトトギス」雑詠欄にこの句を巻頭句として取り上げたことにも驚かされる。虚子の眼力の確かさと、しづの女の教養の深さが、この句を格調高いものとし、後世に残したものと思われる。しづの女は、後に学生を対象にした句会（「成層圏」）を東京で立ち上げ、金子兜太氏の実力を見抜いている。大正時代の俳句史が、必然的にこの句が格調高いものであることを証明している。

（「俳句界」十月号より転載）





# 京鹿子集

## 豊田都峰選

京都 鈴鹿けい子

法師蟬攻めくるものを真に受けず

娘に着せる浴衣の衿を少し抜く

機上より花火見下ろす里帰り

盆帰省我が細道は今もなほ

時刻む蚊取線香身を護る

日日草今日でできること今日のうち

鹿の子や奇麗な蕾大好物

夏の芝活活みどり顔までも

氷水何より旨く透きとほり

文字摺草寝言の夢は宝物

アリソナ 伊吹 之博

風の絵の画廊の窓や秋近し

蓮ひとつポンと咲かせて非公開

金蚤や何が何やらはたへ死

鬼百合を咲かせて里の垣ひくし

滝落ちて竜の骨格造りたる

世阿弥秘すものかはからす瓜の花

夏料理窓いつばいの水平線

三伏や草の匂ひの山羊の乳

桐一葉拾ふ我が掌の小さくて

初盆や二日つづきの語り部に

東京 中島悠美子

京都 中尾 朱帆

オハイオ 水谷 直子

さくらんぼつるからまりて盛られけり

札幌

野村 鞆枝

戸を開けて朝の涼しさ迎へ入れ  
庫裏土間のみがきあげられ仄すずし

滝みあげ見あげつつ行く峡の道

空蟬や子等の手の中宝物

酒田

藤波 松山

夏料理青じそ添へて完とせり

今年竹勢ひ余り親を越し

山百合のおもてなしする山の道

白髪のスマホ視る女サングテス

さいたま

神田 惣介

子つばめは顔いっぱいに口開けて

親つばめ己は食はず又狩へ

つばくらめ二日見ぬ間に長旅へ

蠅虎仏壇のなか自在なり

千葉

伊藤 希眸

振花の茎のよぢれをものとせず

滝壺の白き沸騰男去る

座り胼舐通る瑞江の涼しさよ

ふれた手のあとの淋しき螢の夜

青柿の落ちて初めて知る青さ

匂ひ袋はあなたと私だけの季語

かなかなの木が夕風を聴いてゐる

高く舞ひ来て明日からは秋の蝶

白桃を齡不明の人と食ふ

佐々木紗知

鬼の子の宇宙をめざす宇宙服

みんなの大合唱や忠魂碑

無為の日のひまはり何と大きく

星涼し恐竜博の長き列

抽斗の奥空蟬とチヨコレート

十年を経て親となり盆の月

炎天の衛兵の黙忠烈祠

日盛りや財願ふ人ら龍の寺

夕焼けの染め入るホテル椰子の道

ボンゴ打つ青年に舞ふハイビスカス

夕仕度風に急かされ青簾

一陣の風に舞降る小判草

化粧塩振る夫の指黠はねる

語り部のさらなる飛躍二重虹

二時の陽を鋭角に受けひつじ草

水引草気負うてみても女なり

芙蓉咲く誰かきさうな予感かな

花鳥瓜短き命星になる

山里の腰に団扇の農ひとり

絵団扇の軍配と化す砂被り

おほらかに弥栄祈る祭り酒

雷神を御する役目の山の神

船橋

元橋 孝之

習志野

上野 紫泉

松戸

岡山 敦子

布川 孝子

高野 春子

風ごとに風鈴ちがふ歌うたふ

金子 正道

東京音頭乗つて手拍子街祭

一呼吸置く雷鳴の気取りかな  
端居して話の中を占めたがる

高島正比古

誘ひにはノーと言へぬ娘大花火  
夕立来て置き去る竿に魚信かな  
台風の目より奈落の見えさうで

ひよいと出て美しき跳人に鈴貰ふ

赤点てん白粉花は対岸に

東京 野中 圭子

探し物見つけぬままに夏土用

姑の忌の捧げし経や梅雨深し

室堂は夏の天地の旅所

一筋の風の道あり籠枕

涙出る日々多くなり胡瓜もむ

福島 照子

不器用な別れに細る花水

雨上り影踏みて行く白木樞

丹羽 武正

滝百態刹那々に父の声

街騒を抜け欄干の白团扇

河島 坦

乗り継ぎのバスに間のあり草いきれ

明日見据ゑ朝顔の苗濃くなりぬ

夏座敷畳をすべる月の影

故郷の思ひ出はるか月見草

夏浅し小径ゆるりとひとめぐり

岸上 道也

決断の重き一言扇子置く

ペチユニアに声かけて行く親子あり

児玉 有希

かたくなに团扇はなさぬ老夫婦

ゆつくりと海石暮れゆく夏帽子

男梅雨コーヒータムを駆て持つ

梅雨月とハミングをする露天風呂

蝸牛自由自在の小宇宙

おや蠅だ騒ぐ人あり十五階

予定は未定引つ越し途中の夏休み

深川の風を团扇にさそひけり

堀のない隣のひびき月涼し

梅雨台風うねり湧きたつ鳴くカラス

梅雨の洞迷ひ道せり行者道

夫婦坂ゆるやかに来て雲の峰

愛犬のしやくれ顔消す木下闇

揚花火雑踏の中の孤独かな

神田美千留

焰色小さく灯し夏のバラ

垣沿ひにかすかに赤き水引草

大暑かな目覚めの音はミーンミン

ケロイドの心の疼き原爆忌

中村 三郎

草木の息を集めて青葉風